

北薩方言の複合不完成相と抱合不完成相

黒木 邦彦

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

kujonjaroo9215[at]shoin.ac.jp

Compounding and Incorporating Imperfectives in the Hokusatsu Dialect of Japanese

KUROKI Kunihiko

Kobe Shoin Women's University Institute for Linguistics Sciences

Abstract

鹿児島県北薩地方の伝統方言は、不完成相に相当する複合形式 $V_{STM-i}\emptyset+kata=zjar-$ と抱合形式 $N_{STM}+V_{STM-i}\emptyset=zjar-$ (V: 動詞; N: 名詞; STM: 語幹) を有している。本稿では、両不完成相の形態統語的特徴を分析し、次のことを明らかにした。(1) 複合不完成相においても抱合不完成相においても連濁は生じず、両不完成相に含まれる $V_{STM-i}\emptyset$ の末尾音節は連声し、直前の音節のコーダとなる。(2) 複合不完成相の構成要素たる $V_{STM-i}\emptyset+kata$ の声調型も、抱合不完成相の構成要素たる $N_{STM}+V_{STM-i}\emptyset$ のそれも第1語根に拠るので、音韻的には1語に相当する。(3) 動詞派生接尾辞に関して言えば、複合不完成相の動詞語幹は $-sase-$, $-jare-$, $-cjar-$ を、抱合不完成相のそれは $-sase-$ だけを内包しうる。(4) 複合不完成相はほとんどの動詞語幹から作りうるが、抱合不完成相は基本的に、動作の対象を対格助詞 $=o$ で標示する対格動詞語幹からに限られる。(5) $+ik-i\emptyset=zjar-$ 型のものを除けば、抱合不完成相が内包する名詞語幹は動作の対象を指すものに限られる。(6) 両不完成相で連体節を作る際は、 $=zjar-iu$ が連体節を作りえないため、 $=no$ がその代わりを果たす。(7) 複合不完成相は形態的には非対格述部に通じるが、統語的には対格述部に通じる。一方、抱合不完成相は、対象を指示する名詞を抱合してこそいるが、対格補部を取るわけではない。したがって、形態的にも統語的にも非対格述部の範疇を出ない。

The Hokusatsu dialect of Japanese has compounding and incorporating imperfectives composed of $V_{STM-i}\emptyset+kata=zjar-$ and $N_{STM}+V_{STM-i}\emptyset=zjar-$ (N: noun;

STM: stem; V: verb) respectively. The final syllables of $VSTM-i\emptyset$ in both of the imperfectives turn into the coda of the previous syllable by sandhi. $VSTM-i\emptyset+kata$ and $NSSTM+VSTM-i\emptyset$ in the imperfectives are equivalent to a phonological word because their word tones are based on the first root as in phonological words in the dialect. The compounding imperfectives can be made from most verb stems, whereas the incorporating imperfectives cannot. The incorporating imperfectives are made from verb stems to attach the accusative enclitic =o to a noun denoting a theme, and furthermore, are able to contain only noun stems marked by =o. The compounding imperfectives are morphologically equivalent to a non-transitive predicate but are syntactically similar to a transitive predicate in terms of case marking. On the other hand, the incorporating imperfectives share no morphological and syntactic features with an accusative predicate.

キーワード: 日本語、アスペクト、語形成、動詞、名詞

Key Words: Japanese language, aspect, word formation, verb, noun

1. はじめに

統合的言語とされる日本語では、次のように、派生、複合、重複、迂言で種々のアスペクト的意味を表す。

- (1) a. さつき 図書館で 勉強 し-て-た=よ. 【派生; 継続】
 b. ちょうど 今 食べ+終え-た. 【複合; 達成】
 c. 荷物を 上げ~上げ 考えてた. 【重複; 並行】
 d. 蜚は 当時 絶滅し-つつ あっ-た. 【迂言; 不完成】

次のとおり、日本語の一変種たる鹿児島県旧川内市、旧串木野市、旧市来町の伝統方言(以下「北薩方言」)でも、これは大よそ同じである。

- (2) a. $sensoo=N$ $kotaa$ [...] $annmai$ $oboe-cjor-an=ga=joo$.
 戦争=GEN 事:TOP あんまり 覚え_る-CONT-NEG:NPST=SFP=INTRJ
 ‘戦争のことはあんまり覚えてない。’ 【派生; 継続】
 b. $nengazjoo=o$ $kaqkjage-ta$.
 $kak-i+age-ta$
 年賀状:ACC 書_く-EV+上げ_る-PST
 ‘年賀状を書き上げた。’ 【複合; 達成】
 c. $nimoco$ $age-\emptyset\sim age-\emptyset$ $kange+goto$ $si-cjoq-ta$.
 荷物:ACC 上げ_る-NL~SIM 考え+事 す_る-CONT-PST
 ‘荷物を上げながら、考えごとをした。’ 【重複; 並行】
 d. $tosjo$ $toq-tara$ $dandan$ $nii-te$ $ki-te=née$
 年:ACC 取_る-COND 段々 似_る-MED 来_る-MED=INTRJ
 ‘歳を取ったら、段々似てきてねえ。’ 【迂言; 漸次】

北薩方言では不完成的意味 (<進行> ないし <習慣>) を表す形式が発達しており、次のように、(3) 派生形式、(4) 複合形式、(5) 抱合形式が用いられている。

- (3) a. *sogen kode kodON=na [...] mukasja asu-goQ-ta=naa.*
 koto=de kodON=^wa mukaf=^wa asub-ⁱwor-ta=naa
 そんな 事=INST 子供=TOP 昔=TOP 遊_ぶ-IPFV-PST=INTRJ
 ‘そんなことで子供は昔は遊んでたなあ’ 【習慣】
- b. *atasja moo gaoko=e de-oQ-ta=Q=zjaQ=don*
 atasi=^wa de-ⁱwor-ta=to=zjar-^ru=don
 私=TOP もう 学校=ALL 出_る-IPFV-PST=NL=VLZ-NPST=ADVRS
 ‘私はもう学校へ出てたんだけども’ 【習慣】
- (4) a. *aŋko=de soco noN+kata=zja.*
 socu=o nom-ⁱØ+kata=zjar-^ru
 あそこ=INST 焼酎=ACC 飲_む-NL+方=VLZ-NPST
 ‘あそこで焼酎を飲んでる’
- b. *densja=de kagoŋme iQ+kata=zjaQ-ta.*
 kagoŋma=ⁿi ik-ⁱØ+kata=zjar-ta
 電車=INST 鹿児島=DAT 行_く-NL+方=VLZ-PST
 ‘電車で鹿児島に行こうとしてた’
- (5) a. *aiko=de socu+noN=zja.*
 aiko=de socu+nom-ⁱØ=zjar-^ru
 あそこ=INST 焼酎+飲_む-NL=VLZ-NPST
 ‘あそこで焼酎を飲んでる’
- b. *densja=de kagoŋma+iQ=zjaQ-ta.*
 kagoŋma+ik-ⁱØ=zjar-ta
 電車=INST 鹿児島+行_く-NL=VLZ-PST
 ‘電車で鹿児島に行こうとしてた’

派生形式 *-i^{wor}-¹* は西日本に広く分布する *-i(j)or-* と同源であり、意味の面でも珍しいものではない (cf. 上村 1954; 1968; 津田 2010; 久保蘭 2012)。注目に値するのは、複合形式 *VSTM-ⁱØ+kata=zjar-* と抱合形式 *NSTM+VSTM-ⁱØ=zjar-* (N: 名詞; STM: 語幹; V: 動詞) で、両者はそれぞれ名詞語幹 *VSTM-ⁱØ+kata*, *NSTM+VSTM-ⁱØ* をわざわざ経て、最終的には動詞として振る舞うのである。本稿では便宜的に、前者を「複合不完成相」、後者を「抱合不完成相」と呼ぶ。

¹ 言語形式の表記は基本的に基底表記とし、/// は略す。また、本文以外では// も /// も略す。

1980年代頃から工藤真由美らが日本語諸方言を対象とするアスペクト研究を推し進めたこともあって、日本各地のアスペクト形式とその多様性は広く知られるようになった。しかし、そうした研究の多くは意味論に偏っている。複合不完成相 $V_{STM-i}\emptyset+kata=zjar-$ は、近年、津田(2010)で取り上げられたが、やはり、その形態統語的特徴は看過されている。抱合不完成相 $N_{STM}+V_{STM-i}\emptyset=zjar-$ に至っては、目立った報告もない。

そこで、本稿では、北薩方言における不完成相形式の形態統語的特徴を記述したのち、日本語の述部類型における位置付けについて考察する。

2. 資料

本稿で提示する北薩方言の資料は、質問票を用いての聞き取り調査と母方言話者同士の会話から得たものである。次のとおり、調査協力者の多くは旧串木野市域で生育した老年層である。

(6)	生育地	生年	性別	外住歴
<i>Am01</i> :	旧高城村	1940's 前	男	[18–22] 広島市; [22–70] 鹿児島県内数ヶ所
<i>Bf01</i> :	旧串木野市	1920's 後	女	なし
<i>Bf02</i> :	旧串木野市	1920's 後	女	なし
<i>Bm03</i> :	旧串木野市	1940's 前	男	なし
<i>Bf04</i> :	旧串木野市平江	1930's 後	女	なし
<i>Bm06</i> :	旧串木野市	1930's 後	男	なし
<i>Bf07</i> :	旧串木野市	1930's 前	女	なし
<i>Bm08</i> :	旧串木野市羽島	1930's 後	男	[30代後半から10年間] 大分県佐伯市; [40代後半から10年間] 広島市 ²
<i>Bf09</i> :	旧串木野市荒川	1940's 前	女	[15–23] 福岡市、岡山市
<i>Cm01</i> :	旧市来町	1930's 前	男	[成人後、何十年か] 鹿児島市へ通勤

上記協力者のうち、斜体の ID を付した人物に対しては、質問票を用いての聞き取り調査も実施した。

3. 北薩方言の音韻

日本語学界 (= 日本においてのみカルト的支持を集めている国語学、日本語学、方言学) では、音素を (更には形態素も) 無視するかの如く、言語形式の仮名 (・漢字) 表記が横行している。理解しがたいことに、分節音単位の分析が要求される場合であっても、仮名書きに固執する日本語学者は少なくない。

² どちらの町で働いている時も、各地から集まった人々の中で3ヶ月ほど働いて、旧串木野市で同市生え抜きの家族とひと月ほど過ごすという生活周期。

こうした日本語学界における悪習の打破を期して、本稿の分析は分節音単位で行ない、超分節音も射程に入れる。本節では、そのために必要となる当方言の音韻を必要最低限の範囲で紹介する。

3.1 音素目録と音節構造

北薩方言の音素目録とそれぞれの代表的音価は、次のとおり、標準語のそれと大きくは変わらない³。

(7) 母音音素 (V): i [i], u [u], e [je ~ e], o [o], a [e]

子音音素 (C)

Onset (C₁): m [m], p [p], b [b], w [i]⁴, n [n], r [r], s [s], c [ts̺], z [z ~ dz̺], t [t], d [d], j [j], k [k], g [g], h [ϕ ~ h]

Coda (C₂): ʃ [ʃ], ç, ç (= +coronal, +dorsal, -sonorant, +continuant, -voice)⁵, ɲ [○調音点, +nasal], q [○調音点, -sonorant]

/e/, /z/, /h/ の条件異音は次のように実現する。

(8) e → [je] / #__ z → [z] / V__ h → [ϕ] / __u
 → [e] / elsewhere → [dz̺] / elsewhere → [h] / elsewhere

(7) で異音として挙げてはいないが、次のように、onset の大半は /i/ の直前で常に、/s, z/ は更に /e/ の直前でもしばしば口蓋化する。

(9) m → [m̺] p → [p̺] b → [b̺] n → [n̺] r → [r̺] s → [ç, ʃ]
 c → [t̺ç] z → [z̺ ~ dz̺] k → [k̺] g → [g̺] h → [ç]

[C^w] と、非前舌母音 /u, o, a/ の直前の (= 口蓋化に抛らない) [C] は、(i) /w, j/ が他の子音音素とは振る舞いを異にするように映るといふ音韻論的観点と、(ii) 子音音素の種類を抑えるという経済性の観点から、それぞれ次のように /C^w/, /Cj/ と解釈する。

³各音素の音価に認められる個人差は、現在確認している限りで言えば、次のとおり。

- (I) a. Bf09 における /u/ の音価は安定して [u̺]。e.g. /juo/ [ju̺t̺] ‘雪’
 b. Bm08 の /#o/ (= 語頭の /o/) は [io] でも実現。e.g. oite [ioite] ‘置いて’
 c. Bm08 の /σ.te/, /σ.de/ (= 非語頭の /te/, /de/) はそれぞれ [t̺e], [z̺e] でも実現。e.g. hunanoide [ɸun̺enoize] ‘船乗りで’ naote [net̺t̺e] ‘成って’, softe [soçt̺e] ‘そして’

⁴/#wa/ は [b̺̞e] でも実現 (e.g. wagaekara [b̺̞eɣeekere] ‘我が家から’)。

⁵日本語一般の /si, su, zi/ に対応し、音節末を占めるモーラ音素 (e.g. /ka.gof.ma/ [kagoçma] ‘鹿児島’, /uf.mo/ [uçmo] ‘白も’, /kwaf.de/ [k̺w̺eç.de] ‘火事で’, etc.)。/si/ :: /su/ :: /zi/ が非語頭において中和した姿と考えられるが、本稿ではこの問題には踏み込まない。

(10) /kwe/ [k^we] ‘食べ’, /kwaN/ [k^weŋ] ‘食わん’, /kju/ [k^ju] ‘今日’, /mjo/ [m^jo] ‘苗字’

/C/ の直後の /w, j/ を /G/ (glide) とすれば、北薩方言の音節構造は次のようになる。

(11) (C₁)(G)V₁(V₂)(C₂)

/V₁V₂/ の組み合わせは限定的で、(i) 長母音 [V:] に当たる /V_iV_j/ (= /ii, uu, ee, oo, aa/) か、(ii) /V_[-front]i/ (= /ui, oi, ai/) に限られる。

3.2 語声調

北薩方言は語声調言語で、音韻的語 (phonological word) の末尾音節を高める A 型声調と、次末尾音節を高める B 型声調を有する (日本語学に言う 2 型アクセントの方言; cf. 窪園 2012)。そして、次に示すとおり、音韻的語の声調型を決めるのは第 1 語根である。

(12) a. a[↓] . geN ‘上げない’
 a . ↑ge[↓] . ta ‘上げた’
 a . ge . ↑da[↓] . saN ‘上げれない (< 上げ出さん)’
 (cf. da . ↑saN ‘出さない’)

b. . toi[↓] . ga ‘鳥が’
 .toi . ↑si[↓] . ka ‘鳥しか’
 toi . ↑ha[↓] . da ‘鳥肌’
 (cf. ha . ↑da ‘肌’)

(13) a. ke . ↑ta ‘書いた’
 kaq . kjaq . ↑ta ‘書きなざった’
 kaq . kja . ge . ↑ta ‘書き上げた’
 (cf. a . ↑ge[↓] . ta ‘上げた’; (12b))

b. ni . ↑wa ‘庭’
 ni . wa . ka . ↑ra ‘庭から’
 ni . wa . ↑toi ‘鶏’
 (cf. toi[↓] . ga ‘鳥が’; (12b))

音韻的語は形態統語的語 (morphosyntactic word) とは必ずしも一致せず、服部 (1950) に言う「附属語」も少なからず含んでいる。たとえば、複合・抱合不完全相の構成要素たる繫辞動詞語根 =zjar- は、形態統語的語の基幹 (base) にはなりにくい (接続詞ないし感動詞の基幹にはなりうる) が、音韻的語の基幹ではある。

- c. tosjokan=de [_{VP}[_N beNkjoo] si-cjoq-ta=doo].
 図書館=INST 勉強 する-CONT-PST=SFP
 ‘図書館で勉強してたぞ’

よって、-iØ は動詞準体接尾辞とする。ただし、-iØ 節は典型的な名詞とは異なり、補部や付加部にはならない。

4.2 語声調

複合不完全相の構成要素たる VSTM-iØ+kata の声調型は、第 1 語根たる VSTM に、抱合不完全相の構成要素たる NSTM+VSTM-iØ のそれも、第 1 語根たる NSTM に拠る。これは他の音韻的語に等しいので、VSTM-iØ+kata も NSTM+VSTM-iØ も音韻的には 1 語に相当する。

- (17) a. ki[↓] . ran ‘着ない’
 kii . ↑ka[↓] . ta | zjaq . ↑doo ‘着てるぞ’
- b. ha[↓] . koq ‘運ぶ’
 ha . koq . ↑ka[↓] . ta | zjaq . ↑doo ‘運んでるぞ’
- c. ni . ↑da ‘脱いだ’
 nuq . ka . ↑ta[↓] | zjaq . ↑doo ‘脱いでるぞ’
- d. ta . ↑taq ‘叩く’
 ta . taq . ka . ↑ta[↓] | zjaq . ↑doo ‘叩いてるぞ’
- (18) a. ki[↓] . mon ‘着物’⁷
 ki . ↑mon[↓] . ga ‘着物が’
 ki . ↑mon[↓] . kii | zjaq . ↑doo ‘着物を着てるぞ’
 ki . ↑mon[↓] . nuq | zjaq . ↑doo ‘着物を脱いでるぞ’
- b. te . ↑ko ‘太鼓’
 te . ko . ↑ga ‘太鼓が’
 te . ko . ha . ↑koq[↓] | zjaq . ↑doo ‘太鼓を運んでるぞ’
 te . ko . ha . ↑taq[↓] | zjaq . ↑doo ‘太鼓叩いてるぞ’

4.3 動詞語幹の制約

4.3.1 動詞派生接尾辞

北薩方言では、次に挙げる動詞接尾辞で派生動詞語幹を作ることができる。

⁷話者 F は kimON を第 1 語根とする音韻的語の末尾音節を高める (= B 型で発音する)。

(19)	a.	b.	c.	d.	e.	f.
	- ^s ase-	- ^r are-	-cJOR-	- ⁱ jar-, - ⁱ jas-	- ⁱ mos-	- ^a n-
				- ^r ar-, - ^r as-		
	CAUS	PASS	CONT	HON, 3	POL	NEG

(i) 複合不完成相の動詞語幹は (19a) -^sase- から (19c) -cJOR- までを、(ii) 抱合不完成相のそれは (19a) -^sase- だけを内包しうる。

4.3.2 他動性

不完成意味を表す際に、複合不完成相と抱合不完成相のどちらを頻用するかは定かではないが、生産性の面では明確な差異が認められる。(i) 複合不完成相はほとんどの動詞語幹から作れるが、(ii) 抱合不完成相は基本的に、動作の対象 (theme) を対格助詞 =o で標示する動詞語幹 (以下「対格動詞語幹」) からに限られる。ただし、次のとおり、対格動詞語幹からであれば、抱合不完成相が必ず作れるというわけでもない。

(20)	war-	cukur-	some-	ut-	nom-	odor-	juokase-	kik-	watar-	ajub-
	割る	作る	染める	打つ	飲む	踊る	教える	聞く	渡る	歩く
kata 型:	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
抱合型:	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓		
	asob-	hatarak-	ik-	ko-	hui-	cir-	sak-	or-	-cJOR-	-kar- =zjar-
	遊ぶ	働く	行く	来る	降る	散る	咲く	居る	CONT	VLZ VLZ
kata 型:	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓	✓
抱合型:			✓							

移動動作を表す watar-, ajub- は対格動詞語幹でありながら、抱合不完成相の構成要素にはなれない。これらの対象は、その他の対格動詞語幹のそれに比べて、他動性に欠ける (ように感じられる) ので、そのせいかもしれない。

なお、非対格動詞語幹 ik- ‘行く’ が許容される理由はよく分からない。

4.4 名詞語幹の制約

次のように、抱合不完成相が内包する名詞語幹は、対格助詞 =o で標示されるような動作の対象 (theme) を指すものに限られる。

- (21) a. sensee=ga kodon=ni eego+juokase-Ø=zja.
先生=NOM 子供=DAT 英語+教える-NL=VLZ:NPST
‘先生が子供に英語を教える’
- b. *kodon=ni eego=o seNsee+juokase-Ø=zja.
子供=DAT 英語=ACC 先生+教える-NL=VLZ:NPST
‘子供に英語を先生が教える’

- c. *sensee=ga eego=o kodoN+juokase-Ø=zja.
先生=NOM 英語=ACC 子供+教える-NL=VLZ:NPST
‘先生が英語を子供に教えてる’
- (22) a. sunaba=de doj=to siro+cukui=zja.
砂場=INST 友達=COM 城+作る:NL=VLZ:NPST
‘砂場で友達と城を作ってる’
- b. *doj=to siro=o sunaba+cukui=zja.
友達=COM 城=ACC 砂場+作る:NL=VLZ:NPST
‘友達と城を砂場で作ってる’
- c. *sunaba=de siro=o doj+cukui=zja.
砂場=INST 城=ACC 友達+作る:NL=VLZ:NPST
‘砂場で城を友達と作ってる’

4.5 文法接尾辞

両不完成相が取りうる文法接尾辞 (cf. 清瀬 2013) は、繫辞動詞語根 =zjar-‘VLZ’ のそれと同じである。ただし、=zjar-ta ‘VLZ-PST’ (常に /=zjaqta/ で実現) が連体節を形成しうののに対し、=zjar-^ru ‘VLZ-NPST’ (直後の要素に基づいて /=zja/, /=zjai/, /=zjaq/ で実現) はそれを作ることができない。そこで、次のように、=zjar-^ru の代わりは =no ‘GEN’ が果たす。

- (23) a. asuko=de soco non+kata=zjaQ-ta huto
あそこ=INST 焼酎:ACC 飲_て:NL+方=VLZ-PST 人
‘あそこで焼酎を飲んでた人’
- b. asuko=de soco non+kata={no / *zjai} huto
あそこ=INST 焼酎:ACC 飲_て:NL+方={GEN / VLZ:NPST} 人
‘あそこで焼酎を飲んでる人’

4.6 抱合不完成相の抱合性

アスペクト的意味を表すものではないものの、「血+走る」「近+付く」「気+高い」のような NSTM+VSTM- 型の抱合動詞 (いわゆる形容詞も含む) は、現代日本語に広く存在する。しかし、生産性の面で言えば、「玉+拾い#する」「崖+崩れ#する」「都+落ち#する」といった NSTM+VSTM-ⁱØ#s_e- (s_e- はいわゆるサ変動詞の語根) 型の抱合動詞に大きく見劣りする。

北薩方言の抱合不完成相は構造の面では NSTM+VSTM-ⁱØ#s_e- に似ており、動詞としての生産性は =zjar- という動詞語根に拠るところが大きい。

5. 統語的特徴

4.1 節で確認したとおり、複合不完成相の基幹たる $V_{STM-i}\emptyset+kata$ も、抱合不完成相の基幹たる $NS_{TM}+V_{STM-i}\emptyset$ も、形態的には名詞に相当するので、両不完成相の構造は $N=V$ から成る非他動述部のそれに通じる。ただし、(3a) のとおり、複合不完成相は対格補部を取りうる点で、非他動述部一般とは異なる。

つまり、複合不完成相は形態的に ($=N=V$ から成る点で) は非他動述部に通じるが、統語的に ($=$ 対格補部を取りうる点で) は他動述部に通じるのである。一方、抱合不完成相は、対象を指示する名詞を抱合してこそいるが、対格補部を取るわけではない。したがって、形態的にも統語的にも非他動述部の範疇を出ない。

6. 抱合不完成相と複合名詞

抱合不完成相は、複合名詞に繫辞動詞を付けた形式と同形である。次のように、 $NS_{TM}+V_{STM-i}\emptyset$ が複合名詞として定着していなければ、判別はたやすい。

- (24) a. *kina tosjokan=de eego+beNkjoo+si- \emptyset =zjaq-ta.*
 昨日:TOP 図書館=INST 英語+勉強+す_る-NL=VLZ-PST
 ‘昨日は図書館で英語を勉強してた’
- b. *doj=kara kotae+kiQ=zja.*
 友達=ABL 答え+聞_く:NL=VLZ:NPST
 ‘友達から答えを聞いている’

次の $NS_{TM}+V_{STM-i}\emptyset$ は、抱合不完成相の基幹としても、次のように複合名詞としても用いられる。

- (25) a. [_N *socu+noN*]=na suk-an.
 焼酎+飲_む:NL=TOP 好_く-NEG:NPST
 ‘酒飲みは好かない’
- b. [_N *kagofma+iQ*=ga] ki-ta=ga hara.
 鹿児島+行_く:NL=NOM 来_る-PST=SFP ほら
 ‘鹿児島行きが来たよ、ほら’
- (26) a. ara [_{NP} *juumee=na socu+noN*]=zja.
 あれ:TOP 有名=VLZ:NPST 焼酎+飲_む:NL=VLZ:NPST
 ‘あれは有名な酒飲みだ’
- b. noQ=taa [_{NP} an *kagofma+iQ*]=zja.
 乗_る:NPST=NLZ:TOP あの 鹿児島+行_く:NL=VLZ:NPST
 ‘乗るのはあの鹿児島行きだ’

連体詞で修飾されていることから分かるように、これらは複合名詞と繫辞動詞語根 =zjar- から成る形式であって、抱合不完全相ではない。

7. まとめ

本稿では次のことを明らかにした。

- (27) a. 複合不完全相においても抱合不完全相においても、連濁は生じない。また、VSTM- \emptyset の末尾は次のように実現する (cf. 4.1)。

子音		母音		混交										
動詞語幹末:	m	b	uw	o/aw	r	t	k	g		e	ko		i _r	s _e
実現形:	n	q	u	e/o	i	q	q	q		e	ki		ii	si

- b. 複合不完全相の構成要素たる VSTM- \emptyset +kata の声調型も、抱合不完全相の構成要素たる NSTM+VSTM- \emptyset のそれも第1語根に拠るので、音韻的には1語に相当する (cf. §4.2)。
- c. 複合不完全相の動詞語幹は -^sase-, -^rare-, -cjor- を、(ii) 抱合不完全相のそれは -^sase- だけを内包しうる (cf. §4.3.1)。
- d. (i) 複合不完全相はほとんどの動詞語幹から作れるが、(ii) 抱合不完全相は基本的に、動作の対象を対格助詞 =o で標示する対格動詞語幹からに限られる (cf. §4.3.2)。
- e. 抱合不完全相が内包する名詞語幹は、対格助詞 =o で標示されるような対象を指すものに限られる (cf. §4.4)。
- f. =zjar-^ru ‘VLZ-NPST’ が連体節を作りえないので、その代わりは =no ‘GEN’ が果たす (cf. §4.5)。
- g. 複合不完全相は形態的に (= N=V から成る点で) は非対格述部に通じるが、統語的に (= 対格補部を取りうる点で) は対格述部に通じる。一方、抱合不完全相は、対象を指示する名詞を抱合してこそいるが、対格補部を取るわけではない。したがって、形態的にも統語的にも非他動述部の範疇を出ない (cf. §5)。

略号一覧

●: 拡張語 (extended word) ●CL: 節 (clause) ●N: 名詞 (noun) ●P: 句 (phrase) ●STM: 語幹 (stem) ●V: 動詞 (verb)

●3: 三人称 (third person) ●ABL: 奪格 (ablative) ●ACC: 対格 (accusative) ●ADVRS: 逆接 (adversative) ●CAUS: 使役 (causative) ●COM: 共格 (comitative) ●COND: 条件 (conditional) ●CONT: 継続相 (continuous) ●CSL 原因 (causal) ●DAT: 与格-向格-処格-様格 (dative-allative-locative-essive) ●EV: (epenthetic vowel) ●GEN: 属格-主格 (genitive-nominative) ●HON: 主格尊敬 (honorifics)

●INST: 具格-処格 (instrumental-locative) ●INTRJ: 間投助詞 (interjectory particle) ●NEG: 否定 (negative) ●NL: 準体 (nominal) ●NOM: 主格-属格 (nominative-genitive) ●NPST: 非過去 (non-past) ●PASS: 受動 (passive) ●POL: 丁寧 (polite) ●PST: 過去 (past) ●SFP: 終助詞 (sentence-final particle) ●SIM: 並行 (simultaneous) ●TOP: 主題 (topic) ●VLZ: 動詞化 (verbalizer)

参考文献

上村 孝二 (1954) 「鹿児島懸下の表現語法の覚書」、『文科報告』3 (再録: 井上史雄ほか編『日本列島方言叢書』27 九州方言考5 (鹿児島県)、pp. 141-50、ゆまに書房)

——— (1968) 「南九州方言文法概説」、『国語国文薩摩路』12、鹿児島大学文理学部国文研究室 (再録: 井上史雄・篠崎晃一・小林隆・大西拓一郎 (編)『日本列島方言叢書』27 九州方言考5 (鹿児島県))、pp. 201-11、ゆまに書房)

清瀬 義三郎則府 (2013) 『日本語文法体系新論』、ひつじ書房

久保蘭 愛 (2012) 「鹿児島方言の「動詞連用形+オル」」、『語文研究』114、pp. 28-47 (左開き)、九州大学文学部国語国文学会

津田 智史 (2010) 「南九州地方のカタとゴツ」、『言語科学論集』14、pp. 65-77、東北大学大学院文学研究科言語科学専攻

Author's web site: <http://www.shoin.ac.jp/>

(受付日: 2016年1月10日)